

ドイツ語（初級 A） 第 11 回 話法の助動詞

範囲：教科書 S. 29-31（CD トラック 36-41）

《今回の基本例文》

33. Darf ich dich einen Augenblick stören? (CD36-2)

一瞬だけお邪魔しても構いませんか？

[話法の助動詞 **dürfen**、時間を表す副詞的 4 格]

34. Können Sie Deutsch verstehen? (CD37-2)

あなたはドイツ語をお話しになれますか？

[話法の助動詞 **können**]

35. Du musst mehr Gemüse essen. (CD38-3)

君はもっと野菜を食べないといけない。

[話法の助動詞 **müssen**、不定数詞 **viel**、**viel** の比較級 **mehr**]

36. Wir sollen die Verkehrsregeln beachten. (CD39-2)

私たちは交通規則に注意すべきである。

[話法の助動詞 **sollen**]

37. Jürgen will Ingenieur werden. (CD40-1)

ユルゲンはエンジニアになりたい。

[話法の助動詞 **wollen**]

38. Ich möchte eine Tasse Tee trinken. (CD41-1)

私は紅茶を一杯いただきたいと思います（紅茶を一杯ください）。

[話法の助動詞 **mögen**、**mögen** の接続法 II 式 **möchte**、助数詞]

教科書第 7 課. 話法の助動詞 (S. 29)

〈話法の助動詞とは？〉 (補足)

◇ 英語では、助動詞として *can, may, must, shall, will...*などを習い、「動詞の原形と併用する」と教えられたはずである。ドイツ語にも助動詞があり、動詞の不定詞とともに使用される。ただし、助動詞は不規則な人称変化をし、使用するときの語順も英語とは大きく異なる。

* ドイツ語の助動詞は「**話法の助動詞 (Modalverb)**」と呼ばれるが、これは直接話法や間接話法というときの「話法」とは関係ない。むしろ、直説法、命令法、接続法（英語の仮定法に相当するもの）の「法 (Modus)」と関係があり（**modal** は **Modus** の形容詞形）、文の内容を単に事実として提示するのではなく、話し手、主語、第三者などの判断（可能、許可、義務、必然、推量、願望など）を含めて示すときに用いる。

教科書 1 話法の助動詞の現在人称変化

◇ 教科書 S. 29 の現在人称変化表を覚えること。話法の助動詞は、単数の 1 人称～3 人称 (ich, du, er/sie/es) に対してのみ不規則変化をし、複数 (wir, ihr, sie) に対しては規則変化をする。

◇ 話法の助動詞と似たような変化をする動詞に **wissen** がある。

	wissen
ich	weiß
du	weißt
er	weiß
wir	wissen
ihr	wisst
sie	wissen

この wissen は情報を「知っている、わかっている、覚えている」意味で、人や物を「知っている、面識がある」ときは規則動詞の kennen を使う (英語の know の意味が 2 つに分かれている)。

(例) Ich kenne ihn.

私は彼を知っている (=彼と面識がある)。

Ich weiß die Wahrheit.

私は真実を知っている (=真実をわかっている)。

◇ 話法の助動詞の語順は、話法の助動詞を定動詞の位置に (平叙文や補足疑問文なら第 2 位、決定疑問文なら第 1 位)、不定詞を文末に置く。(⇒教科書 S. 14、授業第 5 回配付資料 S. 1-2)

(例) He can speak English very fluently.

(助動詞) (原形)

Er kann sehr fließend Englisch sprechen.

(助動詞)

(不定詞)

◇ 話法の助動詞の語順を考えるためには、不定詞句 (⇒教科書 S. 9、授業第 3 回配付資料 S. 2) を手がかりに考えるとよい。話法の助動詞を含まない不定詞句を文にすると、

sehr fließend Deutsch sprechen 非常に流暢にドイツ語を話す

← ← ← ← ← ←

Er spricht sehr fließend Deutsch. 彼は非常に流暢にドイツ語を話す。

となる。つまり、最後の動詞 sprechen を人称変化させて定動詞 (spricht) とし、さらに定動詞第 2 位の原則に従って文の第 2 番目に持ってくる (むろん、Deutsch spricht er sehr fließend. や Sehr fließend spricht er Deutsch. もありうることはすでに述べた)。さて、ここで可能を表す話法の助動詞 können を加えると、不定詞句は

sehr fließend Deutsch sprechen können 非常に流暢にドイツ語を話すことができる

と、話法の助動詞は不定詞句の最後に来る。これを、上と同じく主語 **er** をとる平叙文にすると、

sehr fließend Deutsch sprechen können 非常に流暢にドイツ語を話することができる

← ← ← ← ← ← ← ← ←

Er kann sehr fließend Deutsch sprechen. 彼は非常に流暢にドイツ語を話せる。

となる。つまり、不定詞句の最後に位置する話法の助動詞だけを定動詞として人称変化 (kann) させ、定動詞第 2 位の原則に従って文の第 2 番目に移動させることになる。他方、不定詞句の最後から 2 番目の本動詞は不定詞のまま、位置も動かない。

- ・ 補足疑問文も、平叙文と同様に考えればよい。
- ・ 決定疑問文の場合も、定動詞第 1 位になる以外は同様に考えればよい。

sehr fließend Deutsch sprechen können

← ← ← ← ← ← ← ← ←

Kann er sehr fließend Deutsch sprechen?

彼は非常に流暢にドイツ語を話せますか？

- ・ ここでも、定動詞と結びつきの強い要素（この場合は本動詞）が定動詞から最も離れた文末に置かれる **枠構造** (⇒授業第 5 回配付資料 S. 2) が明らかである。

◇ 話法の助動詞の意味は、必ずしも日本語と一対一対応するとはいえない。教科書の説明にやや詳しく補足すると、

- ・ **dürfen** は「～してよい」という **許可**。否定では「～してはいけない」という **禁止**。許可の意味の *may* に対応する。

- ・ **können** は「～できる」という **可能**、「～してよい」という **許可**、「～かもしれない」という **推量**。 *can* に対応する。

* können の最も基本的な意味は可能で、許可 (～できる＝～してよい) や推量 (～でありうる＝～かもしれない) が派生したと考えればよい。

- ・ **müssen** は「～しなければならない」という **義務**、「～に違いない」という **論理的必然**。 *must* に対応する。

* müssen の最も基本的な意味は「～以外に選択肢がない」、そこから義務 (～しなければならない) や論理的必然 (～に違いない) が派生する。

- ・ **sollen** は「～すべきである」という **道義的要求**、「(誰かが) ～と言っている」という **他者の意思**、「～だそうである」という **噂**。

* sollen の最も基本的な意味は他者の意思 (誰かが～と言っている) で、その「他者」が世間一般のとき、道義的要求 (～すべきである) や噂 (～だそうである) の意味が生じる。このため、「～すべきである」と訳する場合でも、**müssen** (～しなければならない) とはニュアンスが異なる。

** 語源的には *shall* と同じだが、その仮定法形である *should* (～すべきである) に近い使い方をする。

・ **wollen** は「～したい」という**主語の意思**。主語が複数 1 人称のとき (多くは決定疑問文で) は「～しよう」という**促し**。語源的には *will* だが、*want to* や *let's* に近い使い方を
する。

* *wollen* = 自分の意思 / *sollen* = 他者の意思と考えればよい。

・ **mögen** は「～するのが好きだ」という**好み**、「～だろう」という**推量**。推量の意味の
may に対応するが、*like to* に近い使い方もする。

* *mögen* は「～が好きだ」という本動詞として使う場合も多い。ドイツ語には英
語の *like* に当たる他動詞がないので、この *mögen* で代用する。

(例) Wir mögen ihn.

我々は彼が好きだ。 (⇒教科書 S. 25)

・ **möchte** は「～したい」という**願望**。*would like to* に対応する。

* *möchte* は *mögen* の接続法 II 式というかたち (英語の仮定法に相当 ⇒教科書
S. 70) であり、実は独立した語法の助動詞ではない。ただし、極めて頻繁に使うの
で、仮に語法の助動詞の一つとして変化形を覚えておくとよい。

** 同じ「～したい」でも *wollen* より丁寧な言い方になる。接続法は英語の仮
定法と同じく婉曲表現になるため。

◇ 以下、教科書 S. 29～S. 31 の例文に関する補足。

・ Können wir hier in der Nähe etwas essen? (S. 30)

では、**etwas** という不定代名詞が使用されている。**etwas** は漠然と「なにか」を表す代名
詞で (英語の *something* に相当)、語形変化はない。

* 授業第 9 回配付資料 S. 2 で覚えてもらった「物・事」を表す略記号、*et²*、*et³*、
et⁴ がいずれも *etwas* のことであるのはすでに述べた。

・ Auch der Vater muss für die Kinder sorgen. (S. 30)

では、

für *jn./et⁴*. sorgen (4 格) の面倒を見る

という熟語が使われている。

・ Wollen wir eine Tasse Kaffee trinken? (S. 31)

の *eine Tasse* は「カップ 1 杯 (の)」を意味し、*Kaffee* (*m.* コーヒー) という数えられな
い名詞を量るときに用いる**助数詞**である。英語 (*a cup of coffee*) と異なり前置詞は必要な
い代わり、つく名詞と同格になる。

(例) *eine Scheibe* 1 枚の (*f.*)

ein Stück 1 かたまりの (*n.*)

ein Glas グラス 1 杯の (*n.*)

ein Krug ジョッキ 1 杯の (*m.*)

eine Flasche 瓶 1 本の (*f.*)

Ich möchte gern einen Krug Bier trinken.

ビールをジョッキ 1 杯飲みたい (ください)。

* 他動詞 **trinken** の目的語である **Bier** が 4 格なので、助数詞の **ein Krug** も同格の 4 格 (**einen Krug**) になっている。

・ Sie mag etwa 50 Jahre alt sein. (S. 31)

では、50 Jahre (50 年) は **alt** (*adj.* 年をとった) に対する数量を表す副詞的 4 格。基数 + Jahre alt で「～歳」の意味になる。数量を表す副詞的 4 格は、特定の形容詞とともに用いる。

(例) Er ist 1,76 m groß.

彼は身長 176 センチメートルである。

* 50 は **fünfzig** と読む。基数の読み方は、のちに教科書 S. 36 で学ぶ。

教科書 Übung 1 (S. 30、CD トラック 36)

1. **viel** (多くの) は**不定数詞**もしくは不定代名詞で、英語の *many* や *much* に相当する (可算か不可算かによる区別はない)。

2. **einen Augenblick** は時間を表す副詞的 4 格で、「一瞬」の意味。動詞の 4 格目的語ではなく、文中では副詞として扱う。ほか、よく用いるものに下記の例など。

(例) jeden Tag 毎日

dieses Monat 今月

教科書 Übung 2 (S. 30、CD トラック 37)

3. この **es** は自然現象を言うときに用いる主語で、英語の *it* に同じ。 (⇒教科書 S. 21、S. 57)

教科書 Übung 3 (S. 30、CD トラック 38)

3. **mehr** は前述の **viel** の比較級で、「もっと」の意味。**viel** は正確に言えば形容詞ではないが、比較級が存在する。英語の *more* に相当。比較級や最上級についてはのちほどまとめて扱う。 (⇒教科書第 16 課)

教科書 Übung 5 (S. 31、CD トラック 40)

2. **länger** は形容詞 **lang** の比較級で、「より長い」の意味。この場合は副詞的用法で「より長く」。

3. **dazu** は前置詞と人称代名詞の融合形だが、特に「そのために、それについて、それに加えて」の意味で用いられる。 (⇒教科書 S. 27)

教科書² 話法の助動詞に準ずる動詞 (S. 31)

- ◇ **lassen** は**使役動詞**全般「〈4 格〉に～させる」として使うことができる。
* 英語の *let* と語源を同じくする語だが、英語のような *make* や *have* との使い分けはない。
- ◇ **hören** や **sehen** のような**知覚動詞**についても不定詞と併用でき、「〈4 格〉が〈不定詞〉するのを聞く／見る」という意味になる。4 格目的語が意味上の主語となることに注意。
* 英語でも、*hear* や *see* の場合、「原形不定詞」と併用する、と説明される。

(例) Sah ein Knab ein Röslein stehn,

Röslein auf der Heiden. (Johann Wolfgang Goethe)

童は見たり、野中の薔薇。(近藤朔風訳)

* **sah** は **sehen** の過去形（教科書 S. 47、巻末の不規則動詞変化表）、**Knab** は辞書には **Knabe** で掲載されている（**Junge** と同じ意味）。定動詞が第 1 位にあるのは、決定疑問文だからではなく、詩の韻律を強弱格にするため（**stehen** が **stehn** なのも同じ理由）。現代語として普通の書き方をするとこうなる。

Ein Knabe sah ein Röslein stehen.

少年は小さな薔薇が生えている（咲いている）のを見た。

** このゲーテ／シューベルトの歌曲は、以下の URL で聞くことができる (<https://www.youtube.com/watch?v=07Vke7E0D-U>)。

Im Radio hört er einen Sänger Lieder singen.

彼はラジオで歌手が歌曲を歌うのを聞いている。

* 併用する不定詞が他動詞の場合、2 つの 4 格目的語が含まれることになり、1 つは知覚動詞の意味上の主語、もう 1 つは不定詞の目的語となる。この例文の場合、**einen Sänger** が知覚動詞 **hören** の意味上の主語、**Lieder** が不定詞 **singen** の目的語。

連絡先など

教員のメールアドレス：tokan@nifty.com 教員のウェブサイト：http://hasegawa.la.coocan.jp/

授業のウェブサイト（進捗表示、配付資料あり）：http://hasegawa.la.coocan.jp/lecture/